

## 総括研究報告書

1. 研究開発課題名：保健関連ポスト MDG 課題としての Noncommunicable Disease (NCD)  
－ オセアニア・南アジア・アフリカにおける NCD 対策推進のための学際的研究
2. 研究開発代表者：青山 温子（国立大学法人名古屋大学 大学院医学系研究科 総合医学専攻）
3. 研究開発の成果

低中所得国における Noncommunicable diseases (NCD) 対策は、保健関連ポスト MDG 課題の一つと認識されている。2015 年 9 月に国連採択された「持続可能な開発目標 (SDGs)」においても、「目標 3. 健康と福祉」ターゲット 3.4 は NCD 対策である。低中所得国では、疾病構造転換に医療制度の整備が追い付かず、NCD の実態や生活習慣・社会的因子との関連、人々の意識等についての研究は限られており、有効な予防対策や健診は殆ど行われていない。

本研究開発の目的は、オセアニア、南アジア、アフリカの低中所得国において実施した疫学・社会人類学調査結果に基づき、効果的な NCD 予防対策、及び持続可能な健診方法を考案することである。具体的には、パラオ若年層、バングラデシュ低所得層 [地域]、エチオピア地方公務員 [職域]を対象とし、科学的根拠に基づく予防対策策定、健康教育モジュール開発、及び定期的健診の仕組みの提案を行う。

平成 27 年度は、パラオを中心として研究を実施した。まず、シンポジウム「NCD Symposium 2015: Translating Research into Practice」を開催し、疫学・社会学調査結果を広報して、NCD 予防対策について提言した。シンポジウムには、パラオ共和国大統領、保健大臣、及び関係各省庁・伝統首長代表・学識経験者等から構成されるパラオ政府 NCD 対策委員会メンバーが参加し、議論を深めた。あわせて、地域住民を対象としたワークショップを開催し、NCD 予防を阻害する問題点を認識し、実施可能な対策について話し合った。

次に、パラオの食事の栄養価の概算を行なった。外食で提供される食事や弁当、パラオ人が記録した一日の食事の写真をもとに、エネルギー量、各栄養素を概算した。食品の栄養表示、学校給食、学校での健康・栄養教育等についても調査した。これらをもとに、健康・栄養教育教材の原案を開発した。

さらに、パラオ・コミュニティ・カレッジと協力して、学生を対象とした健康・栄養教育セッションを試行した。参加型アプローチにより、ゲーム方式を取り入れて健康課題についての知識を得られるよう工夫した健康教育モジュール、及び食品の栄養表示や食事のエネルギー量等に関する教材を使用した栄養教育モジュールを試行して、学生からフィードバックを得て、教材・教育方法の有効性を評価した。

また、パラオ保健省と協力して、体系的な健診方法と保健指導、及び勤労者とくに外国人労働者を対象とする健診方法を検討した。仕事を休めない人のために、夕方 7 時以降に職場近くで健診を試行した。空腹時血糖検査はできなかったが、HbA1c を測定することにより、血糖値スクリーニングが可能であった。適切な日時に行なえば、勤労者の健診が実施可能であることが示された。

バングラデシュでは、社会人類学調査結果から、糖尿病に対する意識は比較的高く医師の勧めで運動する人がいること、高血圧に対する意識は極めて乏しく減塩の意識がないこと、路上や薬局で安易に血圧検査等がなされていること、食事に加えて間食を多く摂取しており総エネルギー摂取量に関する自覚がないこと、たばこ使用や飲酒が広く行なわれていること等、調査前に想定していなかった事項を含めて、NCD に対する意識・行動の実態が明らかになった。来年度前半に疫学調査結果が判明するので、社会人類学調査結果とあわせ、予防対策の優先課題を定めて健康教育モジュールを開発する予定である。加えて、バングラデシュの研究協力者を日本に招聘して、日本の生活習慣病対策、バングラデシュの優先課題や予防対策の進め方等について議論した。

エチオピアにおいても、社会人類学調査結果の質的分析を進めており、疫学調査を実施していて、これらのデータに基づいて、予防対策を検討する予定である。